

◆「フロッターージュ」なる呼び名は知らなくても、子どもの頃の遊びで体験した人は多いはずだ。10円硬貨や葉っぱなど、凸凹した物の上に紙を置き、鉛筆などでこすって模様を写し取る。学校の教科書にも登場する美術の技法だ。フランス語の「frotter(こする)」に由来する。

時流 地流

◆10月初め、東京都大田区でフロッターージュの企画展があった。大田区といえ、約4千の町工場を持つ「ものづくりの町」。延べ50人がワークショップに参加し、古い機械の部品や工具を色鉛筆で写し取った。B5判のケント紙で計350枚。全部をつなぎ合わせ、縦3頁、横7頁の壁一面を飾るように展示した。

◆仕掛け人は地元の美術作家、酒百(さかお)宏一さん(45)だ。地域密着の手法は4年前に芽吹く。新潟県の農村部を拠点に、昔の農具や漁具などを写し取った。「よくは分からないが、面白いねえ」。おじいちゃん

町工場、色鉛筆で写し取る

ん、おばあちゃんが次々とワークショップに加わり、交流の輪が広がった。

◆移ろう情景を記憶に残したいという。2年がかりの荒川区の活動では小中学生ら5千人が参加した。神社の石畳や工場跡地のレンガ塀、都電の車両……。一部分を写し取ったB5判の作品は1万枚を軽く超える。町の印象が違えば、そろえる色鉛筆も変わる。新潟では11色、荒川では10色で「地域らしさ」を表現した。

◆今回は黒や茶、赤、紫などの6色。使い込まれた職人の道具の神髄だとか。持ち主は今年、不慮の事故で帰らぬ人となった。享年89歳。自宅1階の作業場で一仕事を終え、外出した昼間の出来事だ。後継者のいない町工場は廃業。鉄くすす前の一部を遺族から譲り受け、アート制作に生かす。

◆大田区の町工場の数は最盛期の半分。企画展の小さな建物もかつての工場で、空き屋対策に頭を痛める行政が大学の知恵を借り、交流拠点に衣替えした。町おこしの発想は「あるもの探し」だ。ものづくりを救うとはいかないだろうが、斬新な試みで街なかのにぎわいを創出してほしい。

(山本啓一)